

# 表現をひらく

重度障害者のためのワークショップ



## はじめに

ワークショップにはさまざまな方法があります。

この冊子「表現をひらく」は、車椅子を利用しての重度障害がある方に向けて行われた試みについて、企画・実施の中核を担うアートディレクターの中津川浩章さんのインタビューを中心に構成しました。

中津川さんは25年以上にわたって、さまざまな方に、さまざまな場所に、表現の機会を届けていらつしやいます。今回ご紹介する事例にはその経験から導き出された考え方と方法が詰まっています。

障害の違いはもちろん、参加なさる方の状況に応じて、ワークショップの内容は千差万別。ここに掲載した内容も、その一例です。みなさまの活動の参考として、ご利用いただければ幸いです。



# 1 — WORK SHOP

## ワークショップ

### CONTENTS

- 01 はじめに
  
- 03 **ワークショップ°**
  - 人と人として出会う
  - 最初のきっかけ
  - 一人ひとりの気持ちに寄り添う
  - 準備は万端に、動きは素早く、臨機応変に
  - コラム: ワークショップの画材について
  - ルーティーンには意味がある
  - 参加メンバー自身が「決める」
  - 「絵の終わり」はどこにある？
  - 繰り返しの重要性
  - アートワークショップの目的とは
  - コラム: 重度障害者アートワークショップ支援員より
  
- 17 **展覧会**
  - 展覧会の必要性
  - 展示を通して社会とつながる
  - 見る人を信じる、見る人に委ねる
  - 展覧会のキュレーション
  - コラム: 来場者のアンケートから
  
- 23 **保護者からのメッセージ**
  - 柴田航汰さん 母
  - 伊藤愛梨さん 母
  
- 29 おわりに

## ● 人と人として出会う

初めてワークショップに参加する時はどんな人でも、新しい場所や知らない人に緊張しています。まず名前を名乗り合い、世間話をしたりしながら、リラクセスできる環境をつくります。そして今日はこんなことをします、一緒に楽しんでいこう、と笑顔で伝えます。

最初はお互いに、知らないもの同志。

重度障害がある人と支援者、ではなく、人と人として少しずつわかり合っていく気持ちを大切にしています。

## ● 最初のきっかけ

会場にきていきなり「さあ描いてみよう」と言われても、どうしたらいいのかわからない人がほとんどでしょう。ましてや「何をやってみたい？」と聞かれても、やってみたいことなど、本人にもわからないものです。

最初のきっかけは支援者が作ります。絵筆を差し出してみて、使ってみたい様子ならさかさず描いてもらいましょう。

丸でも線でも、文字でもいい。点でもいい。描きたいものがあればもちろんそれもOK。なんでもいいのでまずは画材を使って「描く体験」を楽しんでもらえれば十分です。

手が止まったら、描かれたものを一緒に眺めてみましょう。

きれいだね、いい形だね、思ったことは声に出して伝えるようにしています。

あなたに興味があるよ、あなたの絵をみているよ、と伝え続けることで、支援者の存在や役割が理解されていきます。

## ● 一人ひとりの気持ちを感じる、想像する。

画用紙に点を一つ描いてそのまま動かさない、というようなこともあります。

描いて欲しい、描かせたい、描いてもらわなくちゃ、そのような気持ちになりがちですが、よく様子を見てください。

やりたいのに緊張して手が出ないのかもしれないかもしれません。隣の人の動きに興味しんしんなのかも知れませんが、表情や目の動き、体の向きや動きから、心の中を想像してみます。

## TIPS

どんな色で描きたいか、最初は自分で選べないかもしれませんが。あらかじめ用意した2色くらいから選んでもらうことからスタートし、徐々に選ぶ色数を増やしていきます。

車椅子に乗ったまま描く場合、初回は塗装用ローラーを使うと、自分の力で塗ることや、面ができていく楽しさを体験してもらうことができます。※塗装用ローラーについてはP07 コラム参照

## ワークショップで使う画材について

重度の障害者のワークショップで私たちが使用している画材などを紹介します。

### 描くスペース

●車椅子での創作の方、車椅子を降りての創作の方、それぞれの動きを想定し、描けるスペースはなるべく広くとる。

### 養生

- 床にホワイトシートを敷いてずれないように固定する。(ブルーシートよりホワイトシートがおすすめ。)
- 汚したくないものが接近している場合は周囲も養生する。養生シートは「マスクー」がおすすめ。(1mくらいの幅が使い易い) マスキングテープで止める。

### 塗装用ローラー

- 車椅子で描く場合、最初はほとんどローラーを使う。自分の力だけで塗ることができるのでテンションが上がる画材。色面が出ていく感動がある。
- 突っ張り棒に装着すると長さが調節できる。
- 車椅子から降りて突っ張り棒を外して描く人もいる。

### 柄つきブラシ

- 突っ張り棒にブラシをガムテープで固定する。

持ち手の部分は握りやすくするため、タオルで巻いてボリュームをつける。

- ローラーよりも複雑な筆跡で描くことができる。

### 持ちやすい絵筆 いろんな太さのものを用意する

- 100円ショップなどでも売っているが、画材店で売っているものなら手入れすると長く使える。

### 紙(画用紙)

- 車椅子のまま描く方のためには、ロール紙の画用紙を用意する。1m～1.3mの長さで切り、車椅子で上に乗ってもずれないように、しっかり床に貼っておく。
- 60分程度のワークショップなら、一人につき四枚くらいは使うつもりで準備しておく。
- テーブルで描く人の画用紙も、ずれないようにテープで止める。

### 絵の具

- 水彩絵の具(たくさん使うので大きいチューブで)
- 使いそうな色を鉢皿に出し、すぐ使えるようにワークショップ開始前に水で溶いておく

### 雑巾と手洗い水

- 掃除用ウエスが毛羽立たず便利。

いろいろな体験をしているうちに、ある時ふと、この色を使いたい、この画材を使ってみたい、などを伝えてくれる時がやってきます。

●準備は万端に、動きは素早く、臨機応変に

ローラーで思い切り描き、紙が色でいっぱいになった時、もっとやりたいようなら素早く紙を変えます。満足したようなら、次は柄つきブラシに画材を変え、疲れたようなら、大きな紙はやめて机に座って絵筆で描くのはどうか、と聞いてみる、などと、参加者の様子を見ながら臨機応変に次の提案をしていきます。画材は何種類も用意して、見るところに出して並べておきます。出しておかないと、使っていないものだとということが伝わりません。

いろいろな体験をしているうちに、ある時ふと、この色を使いたい、この画材を使ってみたい、などを伝えてくれる時がやってきます。

●準備は万端に、動きは素早く、臨機応変に

ローラーで思い切り描き、紙が色でいっぱいになった時、もっとやりたいようなら素早く紙を変えます。満足したようなら、次は柄つきブラシに画材を変え、疲れたようなら、大きな紙はやめて机に座って絵筆で描くのはどうか、と聞いてみる、などと、参加者の様子を見ながら臨機応変に次の提案をしていきます。画材は何種類も用意して、見るところに出して並べておきます。出しておかないと、使っていないものだとということが伝わりません。

他の人が描いているところをじっと見ているときは、同じ画材を見せて「太い筆、使ってみる？」などと声をかけ、反応があったらすかさず画材を渡します。すぐ描かなくても構いません。絵筆に含ませた絵具が画用紙に染み込んでいくのを見ているだけでもいいのです。

焦らず、気持ちに寄り添って何度もアプローチする、粘り強さが必要です。

ロール紙などは、あらかじめ使いやすい大きさに切り分けておく、など、当日その場になって足りないということがあるように、充分準備しておきましょう。

### ● 試行錯誤の繰り返し

一人ひとり、できること、やりたいことが違います。

支援者は注意深く、興味を持って参加メンバーの様子を感じ取り、タイミングを見計って声がけをします。

「他の色を使ってみようか?」「紙を替えてみる?」「車椅子を動かそうか?」

声をかけても分かりやすいリアクションがないこともあるでしょう。表情や目の動き、体の動きや向きから、どんな気持ちなのか、仕草の意味をよく考えて、必要に応じた「次のアクション」を提案します。提案してもノッてくれない時もあり、試行錯誤の繰り返しです。焦らず、取り組んでいきましょう。

小さな変化を感じ取ろう、と敏感に向き合い、対話を続けているうちに、いつしか信頼関係が生まれ、少しずつ「何がしたいのか」に気付けるようになってきます。



## ●参加メンバー自身が「決める」

次に何をするかは支援者が決めるのではなく、参加メンバーが自ら選ぶことが大切です。車椅子から降りて床に直接座って描いてみたくなれば手伝います。

降りてはみたものの、支援員が体を支えても体勢が整わず、描けないこともありますし、何度かやっているうちにできるようになることもあります。

「この人は車椅子から降りて描くことはできない」と勝手に決めないこと。

また、車椅子から降りることが大切なわけありません。

なにより大切なのは本人の意思です。

できることから判断し、表情を見ながら、やってみたいものを提案する。

それをくりかえすことで、やってみたい気持ちが引き出され、「決める」ことができるようになります。

## ●「絵の終わり」はどこにある？

色を重ね続けていると次第に色面が濁ってきます。

この絵はどこで終わりにしたらいいのか。

絵の状態と本人の様子を観察して「これは終わりにしようか？」と声をかけてみましょう。

●絵の状態とは……色が混ざりすぎて濁ってきた、紙が破けてきた など

●本人の様子とは……手が止まってきた、疲れた様子（体力、気力）がある、など

色が濁ってきてても、紙が破けてきてても、本人がノリノリでもっとやりたい様子ときは、満足するまでやる時があってもいいです。「やりたい気持ち」は創造の源でもあります。

やり切った満足感を経験すると、いずれ逆算して破壊の前で止めることができるようになります。

一方で、毎回濁った作品が仕上がるばかりでは、後で見た時本人が残念な気持ちになります。

飾った時うれしいか。美しいと感じるか。ドキドキするか。

匙加減も時には必要です。

重要なのは、支援する側のスタンス。いい作品を残そうとするだけでも、徹底的に本人に任せるだけでもない。その間に着地点があります。

その意味で、続けて何枚か描くこと、描く体験を繰り返すことが、大切なのです。

## ●ルーティーンには意味がある

人は同じことを繰り返す中で、使い慣れ、深まり、工夫する余裕が出てきます。

そして自分の世界を確かめ、その中にある欲望をキャッチすることができるようになります。一つのことを



繰り返す「ルーティーン」には意味があるのです。

表現の変化は遅いもの。

次々に新しい体験をしなければならぬと言ふことはありません。

一方で、参加メンバーの観察や反応をヒントにして、紙のサイズや筆の太さを変えて作品の密度に変化を持たせたり、やってみたい表現にふさわしい画材に変えていく、など、小さな変化はおおいに工夫していきましよう。

### ● アートワークショップの目的とは

アートワークショップは、いい絵を描くためにやることではありません。

また、何かを学んだり、何かができるようになることが目的でもありません。

障害がある人は、その障害が重ければ重いほど、受け身の生活を余儀なくされてしまっています。主体的に何かを選び（自己決定し）、自己表現できるまでに変化していく、そのプロセスを大切にしたい。

大切なのは、障害がある人が「描くこと」を通して、自分の内側にある表現したい欲求を自分をつかむことなのです。

使いたい色を自分で選ぶこと、描き方を自分で決めること、自分自身で何度も試してみること。

どんな小さなことでも自己決定する。それを繰り返すうちに、「やってみたい気持ち」が湧いてきます。小さな手応えや、小さな変化の積み重ねの中から、次へのつながりが生まれるのです。

その結果として、見る人を驚かせる作品が生まれたり、できることが増えていきます。

アートの表現に限ったことではありません。

やりたいことが自分の中から湧いてきて、それをやってみる、という経験を通じて、人は主体的に生きることの喜びを知ることができる。そのことがなにより大切なのです。



## COLUMN

### 重度障害者アートワークショップ支援員より

[ 支援を行う時に気をつけていること ]

#### ●支援員の数は十分に

車椅子のまま描く際は、1人に対して2人以上、最初の頃は3人で支援することもあります。描く位置を変える、使ってみたい色を持ってくる、などの要望になるべく早く応えるためです。車椅子の移動などは保護者の方にお手伝いいただく時もあります。

#### ●楽しくなるような声かけ

気持ちが上がるような声かけをして盛り上げるようにしています。

#### ●アンテナを立てる

何色が使いたいのか、欲しい画材はなにか、どこで描きたいのか、など本人がやりたいと思っていることを察知できるよう、常に気を配っています。最初はこちらから聞いてサポートしますが次第に自ら要求してくれるようになりました。要望をどんどん伝えてくれるとうれしくなります。

#### ●視線と立ち位置

創作中はなるべく座って、目の高さで対応しています。また描く行動(動き)の妨げにならないように動いています。

#### ●汚れても良い服装で(支援員も)

参加者さんには汚れても良い服で来ていただくようお願いしています。特に靴下の替えは忘れずに。そして支援員自身も絵の具がついてもいい服を着ていきます。汚れることを気にしていたら一人一

人をちゃんとみられないし、一緒に楽しめないからです。

#### ●体調の変化に気を配る

それぞれの体力も違うので、疲れていないかな?など体調の変化は常に気を付けています。

#### ●支援員の服装

支援介助する女性がかがむ作業が多いので、背中や腰が見えない丈、胸元が見えない首元の開きの服が望ましいです。

[ 忘れられないこと ]

●最初は緊張している人が、会話を糸口にリラックスして描いていく様子。

●ここキレイだねと、良いところを伝えていくと、段々大胆になって全身を使って描いていく。その姿、パワーには圧倒されます。

●もっともっと描きたい、描いて良いの?という言葉、その時の顔!

●重度障害で車椅子であまり動けないと思っていた方が、実は自分で結構いろんな事ができたことに衝撃。自分の思い込みでこの子は自分でできないことが多いだろうからといろんな事に手を出していたことに反省しました。

●全身絵の具まみれになりながら、あの色、この色と要求が尽きず、手でぬり重ね、最後にふうと満足そうに笑った、その笑顔。良い体験ができて良かったと思いました。

## 2 — WORK SHOP

# 展覧会



## ● 展覧会の必要性

ワークショップで作品を製作したら「展覧会」を開くことが必要です。見せるための工夫をして、描いた本人以外の人が作品を見る場を設けましょう。大きな会場を借りる必要はありません。施設の一角でも、展覧会は開けます。大切なのは展覧会のために場をしつらえることです。

他者の目に触れること、観られる体験は、作者本人の自尊心や、やり遂げたい気持ちを育みます。他の人の作品と一緒に展示されることは刺激となり、次はこんなものを作ってみたい、もっといい作品に仕上げたい、という主体的な気持ちが出てきます。

また保護者の方にとっては、観客からの反応を通して、お子さんの存在を再発見する機会にもなります。

## ● 展示を通して社会とつながる

「障害者」という前提条件とは全く違う角度で、作品を通してさまざまな人と出会うことができるのが展覧会という場です。作品を目の前にした人は、その楽しさや存在感に驚き、心が動き、作者はどんな人なんだろうと興味を持ちます。リスペクトしたり、その人の存在をよりリアルに感じたりすること、実はそれこそ真の意味での「障害者理解」の第一歩なのです。

## ● 見る人を信じる、見る人に委ねる。

説明しなければ、と感じすぎる必要はありません。

生の作品には力があります。足を運んでくれた方は、作品との対話を通して、予期せぬたくさんのことを感じてくれます。その感想に励まされたり、教わることも多いものです。

## ● 展覧会のキュレーション

展覧会を開くためには、「見せる」「楽しんでもらう」ための編集も必要です。

本来、展覧会は絵だけあれば十分なのですが、重度の障害がある人の展覧会の場合は、作品だけあっても、どのようにして描かれたのか、どんなふうにか書いたのかが想像できません。

そこで、作品が描かれたその時の生々しい部分が消えてしまわないように展示します。

たとえば、これまでの展示ではこのようなことを試みてきました。

- 車椅子に乗ったまま描かれた大きな作品は、額に入れず、そのまま壁に。
- 額に入れ、美しく飾る壁も作りメリハリをもたせる。
- 描いている写真、ワークショップの様子をまとめたテキストなど、伝えたいことをパネルに仕立てて、展示に添える。

展覧会で作者自身が作品を語る機会を「アーティストトーク」と言います。言葉でうまく伝えられるかどうかは、全く問題ではありません。作者がそこにいることそのものに意味があります。

「伝えたい」という気持ちに触れ、その声に耳を傾けることは、作者にとっても、観客にとっても、かけがえのない体験となります。

## ●フィードバックのしくみ

アンケート用紙の配布や感想ノートの設置を必ず行うようにしています。

観客から寄せられた言葉から、作品そのものが伝えたメッセージを知ることができ、作者にとってにより大きな励みになります。

スタッフにとっては、感想や来場データ分析から課題を知ることができ、次への出発点にもなっています。

## COLUMN

## 来場者のアンケートから

- 各々の個性、表現方法を見ず、ひとくくりに「障がい者」という事の無意味。アートの本質がここにありました。
- 個性豊かで力強い作品が多くて感動しました。
- 自由な想像力ののびのびとした絵を見て幸せな気持ちになりました。またぜひ機会があれば見たいです。
- 画用紙をとりどりの色で埋めて世界観を輝かせる喜びが、どの作品にも炸裂していて、力強さに圧倒されました。感動をありがとうございます！！意外性がある色の組み合わせや、音楽を感じる模様や、言葉だけで作られた作品など、…芸術には「こうであらねばならない」という限界などないのだということを教えていただけて感謝です！！
- 我が子にも障害があり現在養護学校の高等部に通っています。なかなか自分の意思を表現するのが難しいので、ダイナミックな絵画をみてこのような表現の仕方もあるのだなと思いました。そのような場所を作ってあげるのも必要なのだと思いました。
- 小学生（幼稚園からだともっといい）から施設との交流をひんぱんに持ち、どんな障害があってもそれをその人の特徴ととらえられるといいと思う。机上の勉強だけではムリ。実際に関わりを多く持つことにより本当に差別はなくなると思う。そうすると手伝えることも自分でわかるようになるし、お互いが自然体でいられるようになると思う。
- 「障害者にも、健常者にもない能力があり、健常者にも障害者にもない能力がある」という真実を多くの人が知り、社会を、すべての人のパワーで助け合い補完するような意識がもてるといいのではないのでしょうか。障害者アートを見て、カッコイイことに気付く人がますます増えますように。人が尊敬しあう社会を望みます。

# 3 — MESSAGE

## 保護者からの メッセージ



養護学校の同級生の誘いでワークショップに参加しました。最初はとにかく親子とも緊張でいっぱい。図工や美術が得意だとは思っていませんでしたし、そもそも、車椅子で移動する人は、独歩に比べたらスペース使って迷惑をかける。絵なんて描けるのか、と。

アトリエに行ってみて驚きました。床いっぱい広がった大きな紙。ローラーを使った画材。

中津川さんや支援員さんからの気持ちが上がる声げけに、次第に楽しそうに描き始めました。

先日は本人の希望で車椅子から下ろしてもらい、大きな模造紙に指で描くことに挑戦し、汗だくになって紙一面、全部描き上げていました。その時の満足そうな顔。やり遂げた「達成感」にみなぎっていました。達成感は自信をつけてくれますね。

もう一つ驚いたことがありました。息子は家では、使いやすい右手だけを使うことが多くそれが気になっていたのですが、先日、描くことに夢中になるあまり、右手にローラーをもつて、左手で車椅子を動かしていたんです。やりたいことがあればできるんだ！と驚きました。

思えば、誰かの手を借りるありがたさを教えていた気がします。けれど、やれることはがんばってみようよ、やればできるよ、という声げけを、私自身もするようになった気がします。

現在はアールの事業所のメンバーとなり、作品を描くだけでなく、身の周りのことを自分でやってみる、その背中を押していただいています。

いろんなことに挑戦して、5年後、10年後の成長を願っています。

柴田航汰 母



愛梨が通った小学校は、肢体不自由級の子ども、参加できることは全て普通級の生徒と一緒に、という環境でした。低学年から共に育った仲間たちは、自然と愛梨を理解し、手を貸してくれ、なんでも一緒に当たり前。これは本当に恵まれた環境でした。運動会でも役割が与えられる、そのことに感動したものです。

毎日会うことで、日常になる。たまに交流するのではわからないのです。

でもそのような機会は大人になるにつれ、どんどん減っていきます。

ワークショップには、小学校の時の支援級の先生が紹介してくださって参加しました。最初こそ緊張しましたが、娘のどんな判断も褒めてくれ、やりたい気持ちを引き出してくれる場の雰囲気、すぐに信頼感を覚えるようになりました。

工夫された画材、大きな紙。思うままに、好きにやってみていいと仕向けてくださる中津川先生と支援員さんの存在。やってみることがなんでもできる。そのこと自体がうれしいのです。今では絵具にない色を作ってほしいと要求したり、意外なほど細かい意思表示もできるようになっています。

アールのワークショップが素晴らしいのは、そこで終わりではなく、展覧会があること。

活動が「作品」になって、他の人の作品と一緒に並び、知り合いにも、知らない人にも見てもらえます。経験が閉じてしまわず、展覧会、という場を通して社会に開かれている。お客さんと会話ができる。その活動には大きな可能性を感じます。

バリアフリーは進んでいる、と言いますが、車椅子の人が行かれるところはまだまだ限られています。



す。車椅子を押していると視線を感じます。親切な人もいますが、奇異な目で見る人も。障害がある人の存在を常に身近に感じられる環境は、社会に不可欠なのです。

いろいろな障害がある人が、たくさんの人と出会う場があり、当たり前前に自然に溶け込める。そんな社会になってほしいと切に願います。

伊藤愛梨 母





## おわりに

どんな障害があろうと自分らしく生きることを追求する「アール・ド・ヴィーヴル」の活動は今年9年目を迎えます。

WAM助成を受けて実施した事業では、重度障害がある方々にアートワークショップに参加していただく機会を提供することができました。また、その活動と作品を社会に向けて発信することを通じて、障害がある人と多くの方との出会いの機会を設けることができました。心より感謝申し上げます。

今年度は「重度障害者のための表現活動」における私たちの取り組みの試行錯誤の一端を、中津川浩章アートディレクターのご協力をいただき、ドキュメントとして編集いたしました。

この冊子が、取り組みに共感いただき、挑戦してみたいと感じる皆様のお手で、活動のヒントとなることを願っています。

また、アート活動を通じてお一人でも多くの障害がある方が自己表現の機会を得て、社会の一員として多くの人と出会うこと、そして障害者理解が進むことを、願ってやみません。

## 表現をひらく

重度障害者のためのワークショップ

2021年3月15日発行

### 企画・編集・発行

認定 NPO 法人 アール・ド・ヴィーヴル

250-0055 神奈川県小田原市久野 403-17

電話番号・FAX: 0465-25-4534

info@artdevivre-odawara.jp

<http://artdevivre-odawara.jp/>

協力……中津川浩章

萩原美由紀・アール・ド・ヴィーヴル

構成・編集……合同会社スタジオパンダ 牛山恵子

写真……アール・ド・ヴィーヴル

エディトリアルデザイン……TAICHI ABE DESIGN INC.

助成……独立行政法人福祉医療機構（WAM）

© 認定 NPO 法人アール・ド・ヴィーヴル

無断転載厳禁